

学校が変わる

直言

23 8. 22

日教新聞



高塚 人志・鳥取大学医学部准教授

「にんげん」は「人の間」と書く。人と人が支えられたり支えたりしながら人の間で生きていく。ところが、他者と向き合い、関わり合い、分かれ合うことに、子どもから大人まで苦戦している。

こうした状況を少しでも改善するため、「赤ちゃん登校日」授業を発案した。小・中学生、高校生と赤ちゃん親子を対象としている。

全4回の学習プログラムは、

子どもの心と体

⑨

コミュニケーションの基礎を学ぶ「事前学習」と、3回にわたる赤ちゃん親子との継続的な「関わり体験」からなる。

事前学習では、演習などを通して「他者に温かい関心を持ち、相手に近づき、『みること・きくこと・伝えること』を学ぶ。「赤ちゃん親子との関わり体験」は、学校にやってきた赤ちゃん

赤ちゃんとの関わりが育ちを生む

実践し、深めていく。

このように赤ちゃん和交流する理由は三つある。一つ目は、赤ちゃんは言葉のやりとりが得意なことだ。赤ちゃんとの関わりを膨らませるには、自分から積極的に心を開き、全身で赤ちゃんの心のありようを読み取るしかない。その経験が、言葉に頼らず人と真剣に向き合う人

誰かの関わりがないと、命を膨らませない。そのことを実感すると、子どもたちの心は大きく揺さぶられる。自分も赤ちゃんだったのだと分かり、自分が愛されてきたことを実感する。生きていく元氣と勇氣を得て、自分を大切にしようになる。

鳥取県で誕生した「赤ちゃん登校日」授業は、島根県、石川県、香川県、奈良県、静岡県と全国に広がりがつつある。この授業を実践する学校が増えることは、「自分とそばにいる人を大切に思う」子どもが増えることである。

ちゃん親子と子どもたちが1対1でペアとなり、1カ月に1度のペースで関わり合う。基本的なマナーやコミュニケーションを重視しながら、1対1の継続的な関わり体験を通し、子どもたちは事前学習で学んだことを実

間関係の基礎になる。二つ目は、赤ちゃんが相手だと子どもたちは心を開いて向き合える。赤ちゃんは、否定や批判の言葉を使わないため、子どもたちは安心して自分の考えや気持ちを伝えられるのだ。

最後に、一人では何もできない赤ちゃんを目の当たりにすることに意味がある。赤ちゃんは

人が命輝かして生きるには、人と関わり、つながる必要がある。赤ちゃんとの関わりを通して、子どもたちは、とても

最後に、一人では何もできない赤ちゃんを目の当たりにすることに意味がある。赤ちゃんは

人が命輝かして生きるには、人と関わり、つながる必要がある。赤ちゃんとの関わりを通して、子どもたちは、とても

詳しくは拙著「赤ちゃん力」(エイデル研究所)参照。(たかつか・ひとし)